日本家族社会学会ニュースレター

Japan Society of Family Sociology Newsletter

No. 68　2022 年 5 月 13 日発行

編集 多賀　太（庶務委員・広報担当）
発行 日本家族社会学会事務局
〒658-0072 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学 文学部 中里英樹研究室
☎ 078-435-2601

〔Web 公開版〕

目次

会長挨拶　1
日本家族社会学会第 32 回大会のご案内　2
第 11 期理事選挙のご案内　4
各種委員会報告　6
第 7 回活動点検会員アンケートの結果について　9
事務局だより　11
追悼　森岡清美先生　12
編集後記　14

資料　第 7 回活動点検会員アンケート集計結果

会長挨拶

池岡義孝（日本家族社会学会会長／早稲田大学）

第 10 期理事会も、任期の最後の 3 年目に入っています。その 3 年目の年明けすぐの 1 月 9 日に、森岡清美先生のご逝去という悲しい知らせに接しました。森岡先生は、本学会の前身である家族社会学セミナーを 1968 年に組織され、それが発展的に解消して 1991 年に日本家族社会学会が誕生してからは初代会長として学会の基礎を築かれ、その後も長く学会を支えていただき、本学会にとってまさに「生みの親」といえる存在でした。本ニュースレターには、東京教育大学での教え子である石原邦雄先生に追悼文を書いていただきました。森岡先生のご冥福をお祈りいたします。

第 10 期理事会は、スタートして半年後に始まった新型コロナウイルスのパンデミックとともに歩んできましたが、さらに本年 2 月末からは国際世界の秩序を揺るがすロシアによるウクライナ侵攻が始ま

り、いまだに収束の気配も見えない厳しい状況が続いています。しかし、コロナの方はワクチン接種が進んだこともあり、「ウイズコロナ」の時代に移行しつつあり、規制が緩和される傾向にあります。このため、今期理事会として最後の大会となる、日本女子大学を開催校として 9 月に実施する第 32 回学会大会は対面で行うべく、研究活動委員会と開催校で準備を進めていただいています。多くの会員のみなさまの報告と参加を期待しています。

コロナ前に完全に戻ったというわけではありませんが、2 年前のような先の見通しのきかない危機的状況は脱したということで、これまで 2 年間行ってきた学生会員と 65 歳未満の減額会員を対象とした年会費の減額措置は今年度は行わないことにいたしました。どうかご了解ください。

本ニュースレターには、各委員会の活動報告とともに、昨年 11 月に Web 調査で実施しました「第 7 回活動点検会員アンケート調査」の結果と、それらに対する各委員会からのコメントを掲載してあります。第 10 期理事会がスタートしてほぼ 2 年が経過した時点でのアンケートですから、今期理事会の活動への評価が表れています。終身会員など新たな会員区分の検討を含めて、残りの任期中の活動にこれらのご意見を活かし、今期では果たせない課題については次期の理事会に申し送ることにいたします。

このあと、近日中に次期の理事選挙がはじまります。今回から電子投票で行われることになるだけでなく、選挙区の理事定数、投票の連記数が変更になっています。本ニュースレターには「第 11 期理事選挙のご案内」として詳細を説明してありますので、それをお読みのうえ投票していただきますよう、よろしくお願いいたします。

このままコロナの急激な感染拡大がなく予定通りにいけば、学会大会で久しぶりにみなさんと直接お会いすることができますから、いまから楽しみにしています。

日本家族社会学会第 32 回大会のご案内

永井暁子（第 32 回大会実行委員長／日本女子大学）

日本家族社会学会第 32 回大会を日本女子大学目白キャンパスにおいて開催いたします（共催:日本女子大学現代女性キャリア研究所）。私をはじめ大会実行委員の多くが所属する/していた人間社会学部は、1990 年に川崎市西生田の地に新設された学部でしたが、昨年 2021 年 3 月に目白キャンパスに戻ってまいりました。決して広いキャンパスではありませんが、文京区の有形文化財に指定されている成瀬記念講堂においてシンポジウムを開催し、本学卒業生の建築家妹島和世氏がグランドデザインを手がけ新設された 120 年館に会員ルームを設置する予定です。

大会実行委員会は、実行委員長の永井暁子のほか、大澤朋子会員（実践女子大学）、大日義晴会員（和洋女子大学）、野辺陽子会員（日本女子大学）、林浩康会員（日本女子大学）の 5 名で担ってまいります。新型コロナウイルス感染拡大防止に関して、本学の行動指針に基づき、感染防止に努めてまいります。充実した学会大会となりますように準備を進めながら、皆様のお越しを心よりお待ちしています。

1 日程 : 9 月 3 日（土）、4 日（日）
2 会場 : 日本女子大学目白キャンパス
〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1
・JR 山手線「目白」駅
徒歩 : 約 15 分
バス : 約 5 分　都営バス（白 61）新宿駅西口行き、またはホテル椿山荘東京行き
「日本女子大前」下車

・東京メトロ副都心線「雑司が谷」駅（3 番出口）
　徒歩：約 8 分
・東京メトロ有楽町線「護国寺」駅（4 番出口）
　徒歩：約 10 分

3 参加方法：
大会参加を希望される会員は、事前に参加登録と参加費の納付が必要です。今大会は**対面開催であっても当日参加登録はできません**のでご注意ください。
大会ホームページ
http://www.wdc-jp.com/jsfs/conf/2022/index.html

大会参加申し込みは、事前登録のみ／クレジットカード払いです。
（クレジットカードによるお支払いが難しい場合は、大会メールアドレスまでご相談ください。）
大会参加費は、一般 3500 円／学生・減額会員 2500 円です。
本大会では懇親会の代わりに飲食を伴わない交流会（参加無料、事前参加アンケート有）を行う予定です。ふるってご参加ください。

！ご注意ください！
・当日参加は受け付けておりません。必ず期日までにお申し込みください。

4 キャンセル料：
・オンラインに切り替わった場合も、参加費は変更いたしません。
・中止になった場合、参加費を返金いたしません。
ご理解のほどよろしくお願いいたします。

5 新型コロナウイルス感染症拡大、災害などによる対応：
研究活動委員会によるキャンセルポリシーをご覧ください。

6 昼食：
両日とも、事前にお弁当購入の申し込みを受け付けます。大会申し込みとは異なる申し込み Web サイトを設けますので、そちらからお申し込みの上、当日お弁当お受け取りの際に、現金でお支払いください。近隣のレストランやコンビニは数が限られており、レストランは休日休業のところもございますのでご注意ください。

7 宿泊：
宿泊につきましては、各自で手配をお願いいたします。

8 託児サービス：
今大会ではコロナの感染状況の影響を鑑み、残念ながら保育サービスをご用意することができませんでした。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

9 Wi-Fi について：
学内 Wi-Fi については、国際無線 LAN ローミング基盤 eduroam（提携校）のみ利用可能です。ご所属で eduroam についてご確認いただくか、Web サイト https://www.eduroam.jp/でご確認のうえ、本学に

ご来校いただく前に、所属先で登録の手続きをお済ませください。

！ご注意ください！
eduroam のご利用には**事前に登録する必要があります**。本学でご利用する前に、一度ご所属の機関内で eduroam に接続確認しておくことをお勧めいたします。（一度接続できれば、以降は本学をはじめ他機関で認証を求められることは基本的にはありません。）

10 大会に関するお問い合わせ：
〒112-8681　東京都文京区目白台 2-8-1　百二十年館 3 階　309 号室
日本女子大学人間社会学部社会福祉学科　永井暁子研究室内
日本家族社会学会第 32 回大会実行委員会 E-mail: jsfs-taikai☆bunken.co.jp（☆を@に変えてください）

ただし、大会申し込み、参加登録、事前納付等についてのお問い合わせは、以下の日本家族社会学会大会ヘルプデスクにお願いいたします。
E-mail: jsfs-desk☆bunken.co.jp（☆を@に変えてください）

第 11 期理事選挙のご案内

本年度は、３年に１度の理事選挙の年です。2021 年度の総会で改正を承認いただいた「日本家族社会学会理事選挙規程」により、今回から選挙は会員による電子投票にて行います。

本学会では、2022 年４月１日現在で、2021 年度までの会費を完納している方に選挙権があります。2022 年度から入会された方には、今回の選挙に関する選挙権はありません。被選挙権については、通算３期理事をつとめた者および顧問には被選挙権がないほか、学会理事会が定めた特定の理事も被選挙権がありません。後者は、学会理事会の継続性を考えた措置です。

選挙区は「第１区」（北海道・東北・関東・甲信越：定員９名）と「第２区」（近畿・東海・北陸・中国・四国・九州<含む沖縄>：定員６名）に分かれています。選挙区は、有権者の４月 24 日時点での所属機関（所属機関のない者は、居住地）で定められます。所属する選挙区においてのみ、投票ができます。

投票は、第１区は５名連記、第２区は３名連記の無記名投票でおこなわれ、得票数の多かった会員が第 11 期理事となります。理事選挙後、会長選挙が行われます。新会長候補者は、新理事の投票によって選出されますが、理事の互選ではないため、理事以外の会員が選出されることもあります。会長候補者は総会での承認をもって新会長に就任し、総会後に第 11 期理事会が発足します。

近日中に、会員の皆様に、「日本家族社会学会第 11 期理事選挙　選挙権・被選挙権者予備名簿」を学会ウェブサイトの会員マイページに掲載し、会員宛メールでお知らせいたします。この「予備名簿」で、まずはご自身の選挙権・被選挙権をご確認ください。とくに本年４月に所属先が異動された方は、ご自身の所属する選挙区が間違っていないかをご確認いただき、間違いがある場合は、すぐに指定の宛先にご連絡ください。予備名簿を用いての確認期間の後、６月 10 日に電子投票システムを稼働します。システムへのアクセス方法についてはメールでお知らせします。投票期間は２週間です。

本会の運営を担う理事会のメンバーを選ぶ選挙です。会員の皆様におかれましては、理事選挙に必ずご投票くださいますよう、お願いいたします。

日本家族社会学会理事選挙規程の過誤訂正について

⑴ 訂正の主旨

日本家族社会学会理事選挙規程の文面に記載の誤りと思われる部分が見つかったため、下記のような「過誤訂正」をいたします。誤りと判断したのは、理事としての任期を早期に２期終える理事の被選挙権停止の根拠として運用されてきた第１条第２項です。

第１条（選挙権及び被選挙権）

本会の通常会員で前会計年度までの会費を完納していないものは，理事の選挙権並びに被選挙権を失う。また，顧問及び通算３期理事を務めたものは，被選挙権をもたない。ただし，委嘱理事及び大会担当理事の在任期間は，上記の理事在任期間には加えない。

２． 理事のうち若干名は次期の理事選挙に限り選挙権をもたないこととする。具体的にはその都度理事会の協議によって定める。

規程の「改正」は総会での承認事項ですが、上記の第１条第１項の内容、および第２項についてのこれまでの実際の運用から、訂正後の表現が実際の規程の内容であることが明らかであるため、理事会の承認を経て、ニュースレターでの訂正のお知らせによって条文の字句を訂正させていただきます。これは法律の「過誤訂正」の手続きに準じたものとなっております。なお、訂正後の規程はこの後予定している規程類のウェブ掲載の際に公表いたします。

⑵ 訂正内容

第１条（選挙権及び被選挙権）

（略）

２． 理事のうち若干名は次期の理事選挙に限り<u>選挙権</u>をもたないこととする。具体的にはその都度理事会の協議によって定める。

↓

第１条（選挙権及び被選挙権）

（略）

２． 理事のうち若干名は次期の理事選挙に限り<u>被選挙権</u>をもたないこととする。具体的にはその都度理事会の協議によって定める。

中里英樹（事務局長／甲南大学）

理事会報告

<u>2021 年度第 3 回（第 10 期第 8 回）理事会議事録（抄）</u>　（略）

各種委員会報告

編集委員会

１．34 巻 1 号と 2 号の編集状況

このニュースレターが会員の皆さんの目に触れる頃には、『家族社会学研究』第 34 巻 1 号がすでにお手元に届いているだろうと思います。執筆者・査読者のご協力により予定通り発行できたことを、深く感謝いたします。この号では、投稿論文 2 本のほか、前回大会シンポジウム「『パブリック/プライベート』空間の重なりと家族・ワークライフバランス」の特集、会長講演「研究者と学会活動―戸田貞三と日本社会学会」などを掲載しています。この号が、東の編集委員が担当する最後の号になります。

西の編集委員が担当する第 34 巻 2 号も、投稿論文の査読過程に入り、いくつかの原稿依頼を進めている段階です。早いもので 6 号目にあたる今期最終号の編集作業を行いながら、これまでに熱心な査読をいただいた専門委員の皆様、そして書評・文献紹介をはじめとする本誌の原稿依頼に快く応じて質の高い論稿をお寄せくださった会員の皆様に感謝の念を禁じ得ません。この号でも、年度末から年度初めにかけての多忙な時期に多くの会員にご負担をおかけしております。ご協力に、重ねて御礼申し上げます。

２．編集に関わる最近の変更―編集規程／投稿規程／執筆要項／査読ガイドライン／リプライの導入

すでにニュースレターなどでお知らせしましたが、2021 年の秋から冬にかけて、『家族社会学研究』の編集に関わる規程類を改定しました。従来からある「投稿規程」と「執筆要項」を見直す中で、本誌編集全体に関わる方針などを明記した「編集規程」が必要であることに気づきました。そこで、「編集規程」を新設し、「投稿規程」および「執筆要項」の内容も体系的に整理しました。また、それにともなって投稿論文の査読過程の手続きを示した「査読ガイドライン」も微修正しました。と同時に、これまで査読を行う専門委員に参照してもらう「査読ガイドライン」の簡略版を公開していましたが、実際に査読者が参照するものと同じものを公開することにしました。論文の投稿を予定している方は、昨年改定／公開されたこれらの文書を学会ウェブページ（http://www.wdc-jp.com/jsfs/index.html）で必ず確認してください。

昨年の一連の規程類改定により、本誌掲載の書評・文献紹介の対象書籍の著者からリプライ原稿を受け付けることを明文化しました。「編集規程」の第 8 項に「書評または文献紹介の対象となった書籍の原著者は，その書評または文献紹介へのリプライ掲載の申し出を編集委員会に対して行うことができる」と明記されました。この新設ルールは、34 巻 1 号以降に掲載される書評・文献紹介に適用されます。リプライの掲載によって、学会内の建設的な対話や論争が促進されることを期待しています。

（野沢慎司・明治学院大学）

研究活動委員会

１．第 32 回日本家族社会学会大会（2022 年 9 月 3 日・4 日）について

すでに大会ニュース No.1（3 月 22 日発行）でお知らせしているとおり、第 32 回日本家族社会学会大会は、日本女子大学永井暁子会員に実行委員長をお引き受けいただき、3 年ぶりの対面での開催にむけて準備を進めています。しかし現時点でも、新型コロナウイルス感染症拡大は、収束の見通しがたっていませんので、今後の状況によっては、オンラインで開催に変更せざるをえない場合も想定しています。

具体的な開催方法の決定等については、以下の 4 点からなるキャンセルポリシーを定めましたので、お知らせします。

(1) 第32回大会は対面で開催する。ただし、開催地の感染状況に急激な変化があった場合、日本女子大学（開催校）の「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための日本女子大学・大学院の行動指針」に従い、大会実行委員会の判断のもと、オンライン開催に変更する。この変更は8月20日までに決定する。

(2) 8月20日以降の急激な感染拡大あるいは災害等により対面開催ができない場合には大会を中止する。

(3) 決定内容は、できるだけすみやかに大会ウェブサイト、会員メルマガ、大会twitterで周知する。

(4) いずれの場合も、参加費の払い戻しは行わない。

そのほか、「報告の扱い」など詳細については、第32回大会オフィシャルサイト（http://www.wdc-jp.com/jsfs/conf/2022/）の「大会キャンセルポリシー」でご確認ください。

今大会でのシンポジウムは、「性的マイノリティと家族研究」を予定しています。LGBTなど性的マイノリティへの社会の見方が劇的に変化している現在、家族研究者として取り組むべき課題について、広く意見交換するのが本企画の狙いです。当事者が抱える実質的な問題はもちろんのこと、広い意味での家族制度や家族生活への影響、家族を研究対象とする我々の研究活動への影響なども視野に入れられればと考えています。パネリストとして、森山至貴氏（早稲田大学）、大山治彦会員（四国学院大学）、元山琴菜会員（北陸先端科学技術大学院大学）、東優子氏（大阪公立大学）にご登壇いただきます。

その他の企画ですが、企画全体公募型テーマセッション・国際セッション・ラウンドテーブル・書評ラウンジなどの企画申請は、4月15日に締め切りました。採択結果は個別に連絡しています。自由報告の申込みは、報告要旨原稿とともに5月19日（木）締切です。上記の「大会オフィシャルサイト」でお申し込みください。その際にはマイページと同じＩＤ（会員番号）とパスワードが必要です。皆様からのお申込みをお待ちしています。大会参加方法等につきましては、本レターの大会実行委員会記事でご確認ください。

２．報告申し込みの資格要件について

大会で報告していただく方は、申込み前に、本学会が定めた資格要件を満たす必要があります。メルマガでも周知していますが、大会ウェブサイトでご確認のうえ、年会費の支払い、また新入会員の方は入会申し込みなど、要件を満たしていただくようお願いします。

（嶋﨑尚子・早稲田大学）

全国家族調査（NFRJ）委員会

NFRJ（全国家族調査）の近況についてお知らせします。2018年度に実施された第4回調査（NFRJ18）ですが、全体研究会を2022年2月20日・21日にオンラインで開催しました。第二次報告書（研究論文集）は、追加公表分と合わせて計35本がNFRJウェブサイト(https://nfrj.org/)に掲載されておりますので、ぜひご覧になってください。また、成果をまとめた書籍の出版を計画中です。

NFRJ質的研究会（NFRJ18の調査対象者の一部の方を対象にインタビュー調査を実施、その後データを整備）は、21年度まで繰越延長していた科研が終了します。成果については出版計画が進行中です。

NFRJ関連データの公開の動向についてです。NFRJ08-panelのデータが、2021年12月よりSSJDAにて公開されています。興味のある方はご覧になってください。

（筒井淳也・立命館大学）

学会賞委員会

今年は第 9 回奨励論文賞の選考の年です。細則（および細則に基づく推薦募集要項）に規定された要件をみたす論文を対象に、現在、選考委員会で審査を行っています。審査結果は 9 月の学会大会総会にて発表いたします。

（下夷美幸・放送大学）

社会学系コンソーシアム評議員

2022 年 4 月 9 日、オンラインにて、社会学系コンソーシアム第 7 期第 1 回理事会が開催されました。そこでは主に 3 つの議題について議論されました。

第 1 に、理事会体制・事業予定について、日本学術会議との連携の継続が確認され、次回の公開シンポジウムも同会議との共同開催の形をとることが確認されました。また、「人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会」（GEAHSS）や国際社会学会（ISA）等、広くコンソーシアムの HP から告知をしてもよいのではないかとの意見がだされました。

第 2 に、次回の公開シンポジウムついて、テーマ「ダイバーシティと現代社会の不平等性」が提案され了承されました。登壇者は、理事からも意見を募り 4 月末には候補者を絞る予定となりました。今後、2023 年 1 月ごろの開催（予定）に向けて、準備が進められます。

第 3 に、事務体制について、第 7 期より担当事務が変わりました。理事の担当業務の進め方と事務局からのサポート体制について、効率的な作業に向けて今後の改善の在り方等議論されました。

最後に、2022 年 3 月 8 日付で、社会学系コンソーシアムより、「ウクライナ情勢に関する理事会声明」（http://www.socconso.com/20220308-seimei）が発出されました。

（白波瀬佐和子・東京大学）

庶務委員会・事務局

１．会勢について

2022 年 3 月 15 日時点の会員数は 705（一般会員 519、学生会員 99、会費減額会員 86、団体会員 1、賛助会員 0、会費免除会員 0）です。

２．会費納入状況について

新年度の会費納入の依頼がお手元に届いていることと存じます。すみやかな会費納入にご協力くださいますようお願いいたします。なお、会費納入は可能な限り、郵便振込みないしは銀行振込みをご利用いただけますと幸いです（クレジットカードの場合、利用料が事務経費の負担になります）。また、カード決済が可能な期間は 4－6 月ですので、利用申し込みを含め、早めにご対応をお願いします。

３．会費の減額申請について

常勤職にない会員の方は会費減額申請を行うことができますが、65 歳未満の会員については、毎年申請し承認を受ける必要があります。承認の連絡を受けてから会費をお振り込みください。5 月末が申請期限となっておりますので、お急ぎください。申請手続きの詳細は、学会ウェブサイトの「お知らせ／人事公募」>「会費減額申請」（http://www.wdc-jp.com/jsfs/notice/not_4.html）に掲載されています。65 歳以上の会員の方は、一度承認されれば以後手続きの必要はありません。

（中里英樹・甲南大学）

第 7 回活動点検会員アンケートの結果について

2021 年 11 月に「日本家族社会学会第 7 回活動点検会員アンケート」を実施いたしました。2021 年 11 月 1 日時点での会員総数 699 名、有効回収数 129、回収率 18.5%でした。決して高い回収率とはいえないものの、入会から日の浅い会員のみなさまから家族社会学セミナー以来の会員のみなさままで、幅広くご意見を頂戴することができました。また自由記述の多い調査でしたが、多くのみなさまより大変丁寧なご回答をいただきました。お忙しいなか、ご協力をいただきました会員のみなさまに、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

2022 年 3 月理事会にて、詳しい調査結果が報告されました。調査結果は、すでに各委員会において今後の活動を検討するうえでの貴重なデータとして活用させていただいております。以下に、活動点検会員アンケートの実施概要とともに、調査結果を受けた各委員会からのコメントを掲載いたします。さらに別紙に、集計結果とお寄せいただいた自由記述をまとめております。あわせてご覧ください。

実施概要

◆調査時期　2021 年 11 月 1 日～2021 年 11 月 14 日

◆調査方法　Google フォームを利用したWeb 調査

◆有効回収数　129（有効回収率 18.5%、会員数 699 名）

◆【回答者の属性】(%)

問 1［年齢］29 歳以下 6.2%、30～34 歳 11.6%、35～39 歳 8.5%、40～44 歳 10.9%、
45～49 歳 11.6%、50～54 歳 17.1%、55～59 歳 8.5%、60～64 歳 13.2%、
65～69 歳 6.2%、70 歳以上 4.7%、無回答 1.6%

問 2［会員区分］一般会員 76.0%、学生会員 12.4%、会費減額会員 10.9%、無回答 0.8%

問 3［会員歴］入会後 3 年未満 12.4%、入会後 3～5 年未満 10.9%、
入会後 5～10 年未満 22.5%、入会後 10～15 年未満 13.2%、入会後 15～20 年未満 10.1%、
入会後 20～31 年未満 12.4%、家族社会学セミナー以来の会員（31 年以上）18.6%

問 4［役員歴（複数回答)］会長・顧問・理事・会計監事のいずれか 11.1%、
複数年にわたる（専門）委員 21.6%、単年度に委員 13.1%、役員の経験はない 54.2%

＊集計結果は、本レターの末尾にございます。

研究活動委員会より

研究活動委員会の設問への回答内容について報告いたします。オンライン開催となった 2020 年度大会ならびに 2021 年度大会については、すでに大会時のアンケートで多くの参加者から詳細なご意見をいただいております。

そこで、今回の会員アンケートでは大会についての質問は設けず、国際学会に焦点をあて参加状況や評価を伺いました。その結果、コロナ禍によって国際学会参加は、オンライン開催であっても参加頻度が大幅に低下し、半数程度が「対面と比して参加しにくい」と評価しています。とはいえ、コロナ収束後の国際学会等での研究報告については、意欲は高く、学会による「開催に関する情報をメルマガで広報する」、「家族社会学会大会で、スキルアップや情報交換などの企画を実施する」ことが役立つとのご意見が寄せられました。

また、「家族社会学においてとくに議論すべきテーマ」を自由記述で尋ねたところ、多くの具体的なテーマを挙げていただきました。さらに、「学会大会や機関誌刊行以外に本学会の研究活動にふさわしい企画」については、キャリア初期研究者の支援や研究例会などの活動企画案を提示いただきました。次期

研究活動委員会に引継ぎ、学会大会の企画に反映してまいります。貴重なご意見をありがとうございました。

（嶋﨑尚子）

編集委員会より

アンケートの結果からは、『家族社会学研究』編集委員会の活動に概ねご理解とご支持をいただいている印象を受けました。日頃から投稿論文の査読や掲載原稿を依頼する際に感じている印象ともほぼ一致していて安心しました。と同時に、勇気づけられました。

アンケートでは、冊子体（紙媒体）の『家族社会学研究』発行と同時に会員限定で電子版（J-Stage）も公開するシステム変更（33 巻 1 号より）についての質問を設けました。これには概ね支持をいただいています。非会員も含めてすぐに電子版無料公開する案、印刷版をやめて電子ジャーナルのみにする案については、継続案件として次期編集委員会に引き継ぎます。

昨年度の編集関連規程類の改定については、必ずしも十分周知されていないことがわかりました。ニュースレター（本号 8 ページ）の編集委員会報告の記事に簡単な説明を再掲していますので、ぜひご参照ください。

自由記述欄には、編集委員会の査読過程における役割や学会の性格についてのご批判やご提案もありました。例えば、査読過程に編集委員会がもっと介入すべきとのご提案があり、この点については、編集委員会の中で議論をしました。今期の編集業務の中でそのような必要はほとんど感じられなかったという評価が共有され、現状を変える必要はないとの結論に至りました。他学会誌では、投稿論文に受理（掲載決定）日付を記載しているが本学会誌ではしていないことのご指摘もありました。この点は編集委員会で引き続き検討したいと考えています。

掲載記事のテーマについても多くのご示唆やアイディアをいただきました。今期中には十分反映できませんが、次期の編集委員会にしっかり引き継ぎたいと考えています。ありがとうございました。

（野沢慎司）

全国家族調査（NFRJ）委員会より

NFRJ の活動について、概ね肯定的な評価をいただき、たいへんありがたく感じております。新しい取り組みである「NFRJ 質的調査」の周知度がそれなりにあった（「知らない」は 17%）ことから、この研究プロジェクトへの注目度が相応にあったものと理解しております。

他方で、NFRJ データについて「一般公開までの迅速さ」の項目が、他に比べると若干ですが否定的な回答がやや多かったので、次回調査では公開や会員利用のあり方を検討課題とすることを委員会で確認しました。

（筒井淳也）

学会賞委員会より

学会賞を授与することについては、若手会員の研究奨励の観点から、好意的な評価と今後の継続を期待する意見をいただきましたが、授賞の対象数について、相異なる意見がありました。細則改訂により複数の授与が実現したことを積極的に評価する意見と、授与は 1 点もしくは 2 点にとどめるべきとの意見です。授与数に関しましては、従来の細則では「原則として 1 点に授与」でしたが、授賞の期間が 3 年に 1 回というなかで、若手会員にとって、よりいっそう研究の励みとなるよう、今期理事会にて「3 点程度に授与」と改めた経緯があります。その点、ご理解いただければと思います。

そのほか、寄せられたご意見から、一般会員への学会賞の周知が十分ではない、と認識しました。このことは次期委員会に引き継ぎたいと思います。

（下夷美幸）

庶務委員会より

ニュースレター、ウェブサイト、会員宛メールでの情報発信について有用に感じていただいている声を届けていただき、ありがとうございます。一方で、運営側で気づかない課題などのご指摘もとても参考になるものでした。できるところから改善を進めていくよう計画しております。

会費については、負担の軽減を求めるご意見と現状の負担軽減策を評価するご意見がありました。また他学会を含め退会に歯止めをかけるための課題や工夫についての情報もいただきました。庶務委員会や今期理事会全体において、会員の皆さんにすこしでも長く学会の活動を続けていただくための方策について検討を進めています。

（中里英樹）

事務局だより

第 10 期理事会も最終年度に入り、3 回目の大会に向けての議論を進めています。「学会設立 30 周年、持続可能な学会活動の構築に向けて」 というスローガンを掲げてスタートした今期理事会ですが、半年後には新型コロナ感染症の拡大がおこり、理事会や幹事会の運営方法もこれまでと異なる対応を迫られてきました。対面の理事会は発足時の大会会場で実施したもののみ、幹事会も最初の 1 回のみで、その後はすべてオンラインでの理事会となっています。会議の前後でのコミュニケーションがとれないことに残念な思いはありますが、移動時間の制約がなくなることで日程調整が容易になって高い出席率を保つことができています。理事会のペーパーレス化が進んだことで効率的な資料共有が可能になり、交通費の節約によって学会財政の健全化のうえでもプラスの面が見えました。

理事会議事録と会員アンケートのコメントでも触れましたが、会員の皆さんが少しでも長く学会の一員として活動を続けていただけるよう、新たな会員区分についても検討を始めています。残り半年を切りましたが、「持続可能な学会活動の構築」をさらに進めて、次の期に引き継ぎたいと考えています。今後も、ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

中里英樹（事務局長／甲南大学）

追悼　森岡清美先生

石原邦雄（本学会顧問・第４期会長）

去る１月９日、長年にわたり精力的に活動され、我が国の社会学、とりわけ家族社会学、宗教社会学において多大な業績を残された森岡清美先生が、98 歳の長寿を全うして逝去された。学生時代からはるばるご指導いただきお世話になりながら、文字通り不肖の弟子といわざるを得ない筆者がこうした一文を書かせていただくのは、はなはだ心苦しいところもあるが、先生の功績とお人柄について振り返ることで、追悼の一助とさせていただきたい。

大著を含む多数の先生の研究業績を振り返ることは、この場では不可能であり適切でもないので、いずれ学会の課題としても取り組んでいただきたいが、筆者なりに要約すれば以下のようなるだろうか。

長年にわたり、先生は研究者として 2 足の草鞋（宗教社会学と家族社会学）を履いてきた、と自己紹介してこられた。そのうちのひとつ宗教社会学については、周知のとおりその多大な功績を認められて、1990 年に紫綬褒章を受章されておられるが、ここでは本学会との関連も考えて、先生の家族社会学での貢献の方に話を絞らせていただく。

森岡家族社会学と称してよいものは、（方法論的）核家族論を基礎として、集団としての家族に独自の時間的展開過程としての周期的変化を位置づけ、さらにそうした家族現象が歴史の流れの中でも変化していくことを家族変動論としてとらえるとする枠組みによって、家族という社会現象を科学的体系的にとらえられることを示し、個別科学としての家族社会学を確立させたことが大きな業績といえよう。それを裏付けるものの一つが、望月嵩先生との共著で長く版を重ねた『新しい家族社会学』(1983)といってよいであろう。

しかし、こうして家族研究の体系化を示した後も、そこにとどまるのではなく、米国での学際的研究動向をいち早く取り入れて次なるパラダイム革新への展開を図ろうとしたのが、ライフコース論の導入であったといえよう。

こうした理論的、実証的な家族研究への貢献と並んで、森岡先生の日本の家族社会学への大きな貢献として、研究者コミュニティの組織化、共同研究の推進、国際的研究交流の開拓といった側面も強調しておきたい。

小山隆先生を支えながら、R.Hill ら海外の研究者たちと協力して第 9 回国際家族社会学セミナー（1965 年）を成功させるとともに、その経験をさらに国内の家族研究者たちの相互研鑽の場とするべく、ワークショップ形式の「家族社会学セミナー」を発足させ、かつそれを 20 年余にわたり継続開催することによって、研究者コミュニティの形成・発展を主導したことは、強調されてよいだろう。そして、この家族社会学セミナーの継続・発展を踏まえて、1991 年に日本家族社会学会が誕生し、先生はその初代会長に就任するとともに、その後も陰に陽にこの学会の発展に助力を惜しまれなかったのである。その中の一つが、先に挙げたライフコース論の導入と日米協力による FLC と呼ばれた比較研究であり、また「日中家族比較研討会」からはじまる中国との研究協力、さらに研究者集団による独自の全国無作為サンプルによる家族の総合調査実施とそのデータの公開利用（NFRJ プロジェクト）の展開に他ならない。これらについては、筆者も正岡寛司先生らとともに協力して定着させてきたという多少の自負もある。

上記の FLC プロジェクト以後先生は、個人のライフコース、とりわけご自身と同世代で第 2 次大戦に遭遇した、特攻隊員など「決死の世代」に焦点を当てた一連の研究に打ち込まれ、そこに、ライフコース論におけるコンボイの概念を導入してとらえる視点を開き、これは宗教社会学研究にも適用されて、実に 90 歳を超えたのちの最後の著作となった『真宗大谷派の革新運動』(2016)にも結実されているのである。

さらに晩年になって、先生は、ご自身の大きな問題関心は、それまでの「2 足の草鞋」をも含めて、「歴史社会学」として統合されると思い至り、出発点ともいえる有賀理論を超える視点としてのイエ社会論の展望を得る。すなわち明治維新による日本の近代国家体制は、旧幕藩体制の頂点にあった巨大イエとしての徳川将軍家に代えて、王政復古として天皇家を巨大イエとし、大名などの大イエの解体、小イエの制度化（明治民法による家族=家制度）という形で編成されたものととらえられる。そして敗戦と民主改革によるイエ制度の廃止と核家族（夫婦家族制）化となり、さらにその後の個人化・多様化の動向の中での「高密度ネットワーク家族」へという、全体社会と家族の大きな変動図式を展望するに至ったのであった。（その成果の一つが『華族社会の「家」戦略』(2002)である）

そして、ライフコース論に基づく社会史と個人史を融合させる視点を、ご自身の人生展開にも当てはめてまとめられたのが『ある社会学者の自己形成』（2012）に他ならない。

そこにも詳しく書かれているが、先生は、東京高等師範学校入学以来母校にとどまり、長く教職も続けられたが、60 年代末からの大学紛争期に筑波問題に遭遇することになる。筆者自身も大学院の学生時代であり、新大学構想による教育大解体に抗する戦いに明け暮れた数年間であった。社会学の他の先生方とともに、森岡先生も新大学構想の欺瞞に抗して奮闘しておられたが、学生側のストライキ闘争などに対しては、「一人でも受講したい学生が来れば、講義をするのが教員の義務だ」と堅物ぶりを通しておられたことも懐かしく思い出される。そしてさらに、最後の文学部長として、反対派の教員達の処遇などにも多大の努力を払いながら、見事な「敗戦処理」をしたうえで廃墟となった母校を去られたのである。

そしてその後も、研究者を目指した我々社会学の大学院関係者については、直接の指導学生にとどまらず激励し続け、40 年以上となる今日まで、「教育大社会学の会」として各人の研究成果の発表・討論・懇親の場を続ける柱となっていただいたことも、文字通りの意味で有難いことであった。

さらにこの自伝によって、我々はそこに赤裸々に語られている幼少期の体験が、先生の人間形成の原点になっているとの記述に触れることになる。

コロナ禍ということもあって、家族葬として極めて小規模に執り行われたご葬儀に参列させていただいたが、生前の威厳あるお姿を見事に保って棺に横たわるご遺体の肩口に、慕い続けたご生母の写真が置かれていたことも、長きにわたって超人的に研究活動を続けられ、私たちを導いてくださった先達としての森岡清美先生の終幕として、忘れえぬ一場面となったのである。

合掌

会員異動　（略）

編集後記

第 10 期理事会のもとで発行される最終号のニュースレターNo.68 をお届けします。学会大会も理事会もオンライン開催となり、会員同士が対面でコミュニケーションをとる機会がほとんどないまま、ほぼ２年半が経過しようとしています。その間、各種メディアを通した学会からの情報発信と会員の皆様からの情報提供が、会員間のコミュニケーション手段としてこれまで以上に大きな比重を占めることとなりました。ニュースレターにご寄稿くださった皆様、メールマガジンや学会ウェブサイトに情報をお寄せくださった皆様、そして活動点検会員アンケートにご回答くださった皆様に、改めて御礼申し上げます。今年度こそは、大会が対面で開催されることを祈りつつ、合わせて、各種メディアを通じた会員相互の情報交換の場もさらに充実させるべく、次期理事会に引き継いでまいりたいと思います。

多賀 太（庶務委員会・広報担当／関西大学）

家族社会学会　第7回活動点検会員アンケート調査　集計結果

◆調査時期 2021年11月1日～11月14日
◆調査方法　Googleフォームを利用したWeb調査
◆有効回答数129名（有効回収率18.5％、会員数699名）

問１

年齢	度数	%
29歳以下	8	6.2
30～34歳	15	11.6
35～39歳	11	8.5
40～44歳	14	10.9
45～49歳	15	11.6
50～54歳	22	17.1
55～59歳	11	8.5
60～64歳	17	13.2
65～69歳	8	6.2
70歳以上	6	4.7
無回答	2	1.6
合計	129	100

問2

会員区分	度数	%
一般会員	98	76.0
学生会員	16	12.4
会費減額会員	14	10.9
無回答	1	0.8
合計	129	100

問3

会員歴	度数	%
入会後3年未満	16	12.4
入会後3～5年未満	14	10.9
入会後5～10年未満	29	22.5
入会後10～15年未満	17	13.2
入会後15～20年未満	13	10.1
入会後20～31年未満	16	12.4
家族社会学のセミナー以来の会員（31年以上）	24	18.6
合計	129	100

問4

役員暦（複数回答）	度数	%
会長・顧問・理事・会計監事のいずれか	17	11.1
複数年にわたる（専門）委員	33	21.6
単年度に委員	20	13.1
役員の経験はない	83	54.2
回答数	153	

（1）学会大会について

問5

国際学会・海外での学会参加（コロナ渦以前）	度数	%
ほぼ毎年参加	30	23.3
2・3年に1度位参加している	31	24.0
以前はよく参加していたが、近年は参加していない	14	10.9
あまり参加していない	30	23.3
参加していない	24	18.6
合計	129	100

問6

国際学会参加（オンライン）	度数	%
昨年度、参加した	9	7.0
今年度、参加した（予定含む）	19	14.7
昨年度も今年度も参加した（予定含む）	10	7.8
昨年度も今年度も参加していない	91	70.5
合計	129	100

問7

オンライン国際学会は対面での国際学会に比べて参加しやすいか	度数	%
参加しやすい	5	3.9
参加しにくい	60	46.5
どちらともいえない	52	40.3
無回答	12	9.3
合計	129	100

問8

コロナ収束後に国際学会・海外での学会で研究報告を行いたいか	度数	%
オンラインでの開催であれ、対面での開催であれ、報告したい	60	46.5
オンラインで開催されるなら、報告したい	13	10.1
対面で開催されるなら、報告したい	22	17.1
国際学会または海外での学会で報告したいと思わない	32	24.8
無回答	2	1.6
合計	129	100

問9

今後、国際学会または海外で報告するために、役立つと思われるもの（複数回答）	度数	%
国際学会または海外の学会の開催についての情報をメルマガで広報する	89	45.6
家族社会学会の大会で、国際セッションの数を増やす	33	16.9
家族社会学会の大会で、スキルアップや情報交換などの企画を実施する	69	35.4
その他	4	2.1
回答数	195	

その他（自由記述）：

・国際セッションは日本社会学会のように質が低いので増やさなくてよい

・経験が豊富な方のお話を伺いたい

・NCFRなどで、nfrの成果報告をするセッションに応募する

・It all depends on the willingness of each member of the JSFS.

問10	家族社会学においてとくに議論すべきテーマ　自由記述35件(27.1%)

・ポスト・コロナのワークライフバランス、親ガチャ言説のような出身階層についての意識変化？を踏まえた家族を通じた格差の議論
・人生相談の社会学、ペットと家族
・新型コロナウイルス禍・その後の家族、人々の暮らしについて
・格差
・選択的男女別姓について学会の何らかの提言を含めたシンポジウムがあればいいかなと思います。・家族の視点からジェンダー平等を問う・コロナ禍以降の家族研究（web調査、オンライン・インタビュー等の情報共有）
・社会学だけでなく、多領域でおこなう学際的な家族研究の可能性について
・デジタル化（インターネット）のパートナーシップ・家族への影響
・新自由主義の浸透と家族の変化
・量的調査、質的データの統計的分析など、手法について
・人口減少社会における家族と社会保障
・選択的夫婦別姓
・エイジング関連。老年社会学会がない分、いろんな学会で議論が盛り上がっていったほうがよい。
・社会的養護
・家族社会学研究のグローバルな発信力の強化
・①永遠のテーマともいえる「家族とはなにか？」
②個人にとって家族とは誰と誰かなど「家族の範囲」
・来年度大会なら、「COVID-19が家族にもたらした影響を問う」
・若手研究者(特に院生)の入会促進と研究支援
・Japanese families in shrinking population
・結婚格差と合計特殊出生率
・国際移動、移民と家族について
・家族とは？（学会員の研究者たちは家族の多様性を尊重している方々がほとんどと思われますが、外から見ると、家族の復権を求める超保守的な団体に聞こえるらしいです。）
・家族という枠組みあるいは単位で生じる貧困・格差に関して
・改めて夫婦を考える。
・他の社会学領域とのコラボレーション（政治社会学、都市社会学など）
・量的アプローチと質的アプローチの架橋
・貧困　社会的排除
・地域社会とのかかわりの機会作り/家族と孤立
・介護・介助される側の家族への想いについて
・ケアとジェンダー、家族の学習
・移民、新自由主義
・家族のミライ？：個人や社会にとって、家族の役割・機能の確認・再評価・将来ビジョン
SF小説などに登場する様々なミライをベースに、家族の未来を考える
・コロナ禍と家族、家族における子どもの権利
・パートナーシップ契約
・家族を取り巻く社会の変化（例えば社会制度の変化、国際化など）によって人々の持つ家族観が多様化している。家族研究者が提言する新しい家族観を取り上げて欲しい。
・家族社会学の意義・アイデンティティおよび近接領域との関係について議論してみたい

問11	学会大会や機関誌刊行以外に日本家族社会学会の研究活動にふさわしい企画	度数	%
	なし	115	89.1
	あり	14	10.9
	合計	129	100

あり（自由記述）：

・大学院生・若手研究者に対する研究支援

・10と同様（新型コロナウイルス禍・その後の家族、人々の暮らしについて）でしょうか。

・統計分析に関する勉強会

・先端的なテーマに関するウェビナー

・世間で話題になっていることについての社会学者による解説ページ

・マスメディアへの発信。昨今の政治状況に鑑みるに、プレゼンスが低いと、風当たりが強くなる。

・研究例会などがあるとよい。

・若手中心の研究会活動

・国内外の関係他学会との学術交流

・Periodical oral presentation meetings such as monthly, or quarterly, perhaps via online.

・特定のテーマに関するシンポジウムや若手研究者の検討会とか

・学会として、学会発表をサポートする企画はあって良いと思います。

・TV・雑誌などのメディアを通じて、家族への関心を喚起すべきではないか？

・研究方法や論文執筆に関するワークショップなどあるとありがたいです

（２）機関誌（『家族社会学研究』）

問12	『家族社会学研究』をどの程度読むか	度数	%
	よく読む	25	19.4
	関心のある部分だけ読む	99	76.7
	あまり読まない	5	3.9
	合計	129	100

問13	発行回数（年2回刊行）	度数	%
	1回で十分	9	7.0
	現行のままで良い	107	82.9
	少ない	11	8.5
	無回答	2	1.6
	合計	129	100

問14	新設の「編集規定」、改正された「投稿規定」「執筆要項」のウェブサイト掲載	度数	%
	ウェブサイトで閲覧し、役に立った	47	36.4
	ウェブサイトで閲覧したが、あまり役に立たなかった	2	1.6
	掲載されたことは知っているが読んでいない	46	35.7
	知らなかった	33	25.6
	無回答	1	0.8
	合計	129	100

問15 投稿論文の査読制度について　自由記述8件(6.2%)

・以前、投稿した際に大変丁寧に査読のコメントをいただき、掲載には至りませんでしたがその後の研究に役立ちました。他の方の意見も含めての感想ですが、家族社会学会の査読委員の先生方はとてもサポーティブでありがたいです。先生方の負担も多いとは存じますが、この厳しくも温かな制度が続いていくことを希望します。

・査読を依頼される時期が学期初め等の忙しい時期に重ならないように刊行時期を調整していただきたい。

・査読コメントに偏りのある場合がある。

・真摯かつ親身であたたかみがあり、素晴らしい査読者が多い印象

・大部分の専門委員は丁寧で的確な査読をしてくださって、ありがたいと思う。

・投稿者にとっては査読の流れが不透明なので、査読の結果がいつ返るかわからなくて、投稿スケジュールの設定上に支障があると思う。そこで、デジタルシステムなどを利用して、審査開始の時点や査読意見が返る予期の時点などを示したほうがいいと考えられる。

・査読委員をやっておりましたが、他の学会に比べても、よくできていると思います。ただ、できるだけ多くの人に査読者を経験して頂いた方が良いと思います。実際、自分が査読をしてみて、初めて論文とはどうあるべきかが理解できるようになると思います。また、院生さんの場合は、やはり指導の先生にも事前にしっかり査読してほしいです。

・査読委員のご負担は大きいと思いますが、建設的な査読制度はありがたいです

問16 『家族社会学研究』で取り上げて欲しいテーマ　自由記述20件
①特集②研究動向③政策資料解説④NFRJレポート⑤その他　(15.5%)

・②質的研究動向④４回の趨勢を紹介する論文

・①日本の母子保健・保健制度の問題点と家族③重要です。是非、是非。

・②世代間関係

・①コロナ禍の家族

・①コロナ禍の家族への影響②デジタル化（インターネット）の影響③多文化共生政策の影響④親密な関係性⑤健康（リプロヘルスを含む）

・①団塊ジュニアのライフコース、家族形成②東アジアの家族の国際比較研究③保育政策

・①ジェンダーについて取り上げてください。

・①海外（特に東アジア）の家族

・①性別役割分業②海外の家族社会学研究

・①問10の回答に同じ（①永遠のテーマともいえる「家族とはなにか？」　②個人にとって家族とは誰と誰かなど「家族の範囲」）

・②関連他学会の活動や研究動向の紹介

・④回収率と未回収状況の分析

・⑤査読の水準を下げたくないのは理解しますが、やや掲載論文が少ないように思います。「原著論文」と「研究ノート」の間のような位置づけのカテゴリーの論文があっても良いのかもしれません。

・①家族政策の国際比較

・⑤ご高齢になられた先生方にメッセージをいただく企画

・①配偶者選択

・①障害・疾病と家族について。岡部耕典先生。

・①移民②移民③移民

・①家族のミライ？：個人や社会にとって、家族の役割・機能の確認・再評価・将来ビジョン SF 小説などに登場する様々なミライをベースに、家族の未来を考える②子どもの社会化、特にデジタル情報と心理的発達③子ども手当の変遷、国際比較など④専業主婦も含めた非就業の女性についての調査⑤もう少し国際比較や時事性のある特集や論文がほしい

・①パートナーシップ契約、夫婦別姓②夫婦別姓

問17

J-STAGEで『家族社会学研究』をどの程度利用しているか	度数	%
よく利用する	39	30.2
ときどき利用する	67	51.9
ほとんど利用しない	12	9.3
利用したことがない	11	8.5
合計	129	100

問18

J-STAGEで公開される時期が会員限定で早まったことについて	度数	%
会員限定の早期公開でよい	82	63.6
従来通り早期公開しない方がよい	6	4.7
会員以外にも早期公開した方がよい	39	30.2
無回答	2	1.6
合計	129	100

問19

電子ジャーナルについて 自由記述6件（4.7%）

・とくにありません（使いよいことを臨みますが）

・紙媒体にも電子ジャーナルにもそれぞれの「良さ」があると思いますので、私は両方存続して欲しいです。電子ジャーナルについては、一般に公開した方が広く読まれると思いますので、問18の方法がベストなのではないでしょうか。

・問18で会員以外の公開でいいと思うが、そうなると会員数が減りますか？

・無料閲覧できるといいです。

・問18を選択した理由です。悪意がなくても同時に同じことを研究していれば、必ず同じ結論に達して、それを論文に書く人たちも出てきます。やはり、論文は、会員以外でも、家族社会学者や他領域の家族研究者から、同じ問題提起をして、同じ結論に達している論文も出てくる可能性は、大いにありますから、理系の論文と同じ発想で取り扱った方が、盗作防止及び余計な疑いをかけられる盗作騒動にならずにすむと思います。

論文受理年月日と出版・掲載年月日を必ず明記していれば、自分の頭で考えてしか論文を書かない、正当な研究者であれば、誰が本歌取りをしたのか見抜きますので、幅広い研究者に読んでもらった方がいいと考えます。

一番教育を受けないといけない年代の方は、奨学金しかない状況ですから、関連学会の会員への会費負担はきつすぎます。あらゆる関連ジャンルの論文に目が通せれば、通すほど優れた論文になる事と、自分が目指している日本の社会学者に、世界中の知性がどんなことを期待しているのかを、知る事により、明確で精緻な研究見取り図が描けるようになると考えています。英語も会話がさっぱりで、大した事もできないまま、おこがましい提案を書いています。若い世代の人たちの活躍に期待しています。

経費がどの程度かかるかわかりませんが、選に漏れた論文でも、これは、掲載したいと思われる残念な論文をそのまま掲載するのも、若い人たちの知的関心に刺激を与え、選漏ればかりしている人には、自分の思考パターンの欠落部分を自己発見できて、教育効果も高まるのではないかと思います。本人の了解は、とる必要があるかもしれません。規程を改正すれば、いいかもしれません。最初から2位まで掲載とか。

・査読を通った論文などは随時公開して行き、紙の刊行を最後にすると良いでしょう。

問20 **機関誌の編集方針について**　自由記述7件（5.4%）

・ありません。編集の方々にはいつも感謝しております。

・現在の機関紙のレベルまではいかなくても、会員がもっと自由に自分の研究活動を投稿できる媒体があればと思います。

・海外のジャーナルのように、査読者のコメントを編集委員が整理し、どのコメントに従い、どのコメントは無視してよいのかを整理すべきである。査読者は論文に対して真摯にコメントするという責任があり、変種委員はその論文を家族社会学研究に載せることで、家族社会学研究の価値が上がるのかどうかを判断する責任がある。編集委員がよい論文と評価した場合には、その論文を良い状態に導くという仕事を編集委員はすべきであって、現行のようにとくにコメントを整理せずに、著者がすべてのコメント（よいコメントもあれば的外れなものもある）に対してひとしく対応しなければいけないのは、編集委員が家族社会学研究の研究水準や立ち位置を維持・向上していくという仕事に、貢献できない状態になっている。査読者のコメントはよいコメントもあれば、的外れなコメントもあり、編集委員が整理を率先してやっていくべきと考える。

・他学会の雑誌の幹事をしております．査読制度を維持することも雑誌の定期刊行を継続することも相当に大変なことで，編集委員会や査読の先生方にかかるご負担は大きいと感じます．家族社会学研究のみの問題だとは思いませんが，今後，社会学系の学会ではどこも若手会員は減っていくことが見込まれますし，会員の先生方のご負担（学会の仕事ということではなく，ご所属先の本務も含め）の軽減が進む見込みもそれほどない中で，可能な限り効率的な進め方をしないと現実的に多くの雑誌が続かなくなるのではないかと感じています．

この質問から少し外れてしまいますが，紙での印刷をやめることや刊行頻度を含め，業務負担の軽減を進めていただくことは積極的にご検討いただければと思います．負担軽減につながる変更であれば，多くの若手は反対しないと思います．

・書評も自由に投稿できる制度があればよいと思う
・問19で、要望を書きました。
・特集などで、中堅の先生たちが執筆する機会を増やすと良いと思います。

（３）全国家族調査（NFRJ）について

問21

全国家族調査（NFRJ）についてどの程度知っているか	度数	%
内容について知っている	87	67.4
名前だけ知っている	35	27.1
ほとんど知らない	6	4.7
無回答	1	0.8
合計	129	100

問22

[第4回全国家族調査（NFRJ18）]についてどの程度知っているか	度数	%
内容について知っている	61	47.3
名前だけ知っている	49	38.0
ほとんど知らない	17	13.2
無回答	2	1.6
合計	129	100

問23

[NFRJ18質的調査]の実施についてどの程度知っているか	度数	%
内容について知っている	49	38.0
名前だけ知っている	57	44.2
ほとんど知らない	22	17.1
無回答	1	0.8
合計	129	100

問24a

全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか [NFRJデータの質]	度数	%
非常によい	39	30.2
よい	48	37.2
よくない	3	2.3
非常によくない	0	0.0
わからない	30	23.3
無回答	9	7.0
合計	129	100

問24b 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［東京大学SSJデータアーカイブを通じてデータを一般公開していること］	度数	%
非常によい	77	59.7
よい	30	23.3
よくない	0	0.0
非常によくない	0	0.0
わからない	16	12.4
無回答	6	4.7
合計	129	100

問24c 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［実査終了から一般公開までの迅速さ（現在約2～3年）］	度数	%
非常によい	41	31.8
よい	45	34.9
よくない	13	10.1
非常によくない	2	1.6
わからない	21	16.3
無回答	7	5.4
合計	129	100

問24d 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［ウェブサイトを通じての情報公開］	度数	%
非常によい	54	41.9
よい	48	37.2
よくない	4	3.1
非常によくない	0	0.0
わからない	17	13.2
無回答	6	4.7
合計	129	100

問24e 全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［『家族社会研究』でのNFRJレポート］	度数	%
非常によい	52	40.3
よい	54	41.9
よくない	2	1.6
非常によくない	0	0.0
わからない	14	10.9
無回答	7	5.4
合計	129	100

問24f	全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［家族研究への貢献(研究会活動や学会大会でのテーマセッション］	度数	%
	非常によい	61	47.3
	よい	39	30.2
	よくない	3	2.3
	非常によくない	1	0.8
	わからない	19	14.7
	無回答	6	4.7
	合計	129	100

問24g	全国家族調査（NFRJ）委員会の活動・成果について、どのように評価するか［これまでのNFRJ 委員会のとりくみ全般］	度数	%
	非常によい	54	41.9
	よい	41	31.8
	よくない	1	0.8
	非常によくない	0	0.0
	わからない	27	20.9
	無回答	6	4.7
	合計	129	100

問25	学会が主体となって公共利用データを作成していくことについて	度数	%
	今度とも必要	107	82.9
	今後は必要ない	2	1.6
	どちらともいえない	12	9.3
	わからない	7	5.4
	無回答	1	0.8
	合計	129	100

問26　全国家族調査および全国家族調査委員会について　自由記述10件（7.8%）

・大変な労力がかかるが、若手育成、研究喚起などに有益だと評価している。

・最新調査は難しいものの、常に新しいデータは必要ですね。

・科研費を取れるならば、カップル（各パートナー）のパネル調査を実施してほしい

・今は貢献できないが、参加して今後のために勉強したいというメンバーが参加できる仕組みがあるといいと思います。

・他の大規模データとのすみわけや、サンプルサイズの確保など対処しなければならない問題が多いように感じる

・とても優れた調査だと思っています．また，実査を担当されている先生方にはとても感謝しております．ただ，全国家族調査に限らず，調査の実査を行うことに対する学術的な評価がなされない（論文になって初めて「業績」になる，効率的に業績を上げという点に特化するのであれば調査の実査にはかかわらないほうがよいという判断になる）状況になっている点が気になっております．評価の仕組みがあればいいと感じます．

・継続は力なりと考えています。知的な文化的な仕事の要は、データ保存の一言です。
最近国会でさえ説明責任を果たさない答弁は、知的な議論にならないという、先進国では
当たり前の事が、やっと若手のお陰で、常識になりだしました。更に説明の前提になるのは、現実がどのような状況であるかというデータであり、かつそのデータは、現状分析と経年変化の二点から解釈される事が前提となりました。

国会は立法機関ですから、説明責任は当然現行法がこの社会実態を適切に反映した内容になっているか否かに審判を下す根本的な証拠としてとりあげられます。その大切な証拠が、優れた社会調査のデータです。日本がテクノ社会に対応できるか否かは、このようなデータが存在するか否かにかかっていると思います。東大の社研とのデータ共有できるレベルのこの調査は、家族が分析単位ですから、個人相手の調査より拒否される率が高まり、困難な調査だからこそ、継続できるシステム作りを、お願い致します。

・回収率を上げる必要がある
・よく頑張っていると思います。
・家族を専門とする学術団体がその責任のもとで各時代の家族の様相をあきらかにしていくことはこれからも非常に大事だと思います

（４）学会賞について

問27	日本家族社会学会賞（奨励論文賞・奨励著書賞）について　自由記述6件（4.7%）

・奨励著書賞が４点であったのは、望ましくないと思います。。１点もしくは２点にとどめるべきと考えます。
・著書賞の新設も含め、若手研究者の育成、研究奨励に意義がある活動だと思う。
・継続してほしい
・若い皆様におまかせします。昔は50年から100年単位で時代が動いていましたから、間が飛んでも何となく時代考証はできていました。今の50歳以降世代から、年々変化が加速して、非才の私は授業ができなくなり、早々と団塊世代がひっこんで、若い世代がどんなことをしようが、ただひたすらに耐えがたきを耐えて、若い世代の改革に身を委ねて自己変革を遂げることが、研究者としての使命だと考えるようになり、長寿社会で、早々世捨て人になりました。

余生を、自分のやり残しの研究に全力を捧げようと思って行動しています。ただ、老いだけは確実に脳や体や心を蝕み、若い時のような脳の力は低下していきますので、リモート社会やネット社会は有難い反面、根がレトロですから、家族社会学者として、対面のないかかわりへの違和感は抜きがたいものがあります。

環境社会学者としては、外出できない自然環境になれば、今の生活が常態になるだろうから、慣れが一番と、頭ではしっかり了解できていますが。
・遺憾ながら、あまり関心をもったことがありません。社会学会の方もそうでしたが、自分が選考委員になって、初めて、こういうものがあったのだ！と驚きました。人口学会の方も、今回、初めて委員になり、やはりこういうものがあったのだ！と驚いております。もっと一般会員の関心を高める必要があると思います。人口学会では多めの副賞（現金）を設け、今回は誰が受賞するのかという点に関心を集めるように使用しようと思っています。
・細則が改定されて複数者に授与することが可能になり、実際にもそれが実現できたことが大きな前進だと思います。

（5）学会ニュースレターについて

問28 学会ニュースレターについて　自由記述3件（2.3%）

・オンラインとなり、容量制限がなくなったので、定例記事以外にトピックや会員の投稿など豊富にしてもよいと思います。

・現状大変良いニューズレターだと思っております。

・最近になり読むようになりました。大会報告などのレビューは、大変、参考になります。

（6）学会ウェブサイトについて

問29 学会ウェブサイトについて　自由記述5件（3.9%）

・会員サイトのログアウトは、ログアウト画面に移動してからログアウトボタンを押す必要がある。画面の端にでも常にログアウトボタンがあるとよい。

・「関連サイトへのリンク」が不十分

・英語HPをより充実してほしい。

・トップページのデザインをもう少し魅力的なものにしたほうがいいと思う。

・必要な時にしか見ませんが、ウェブサイトとはそういうものだと思っています。人口学会のように会員業績DBや過去の大会報告記録などを閲覧できるようにすると、良いではないかと思います。大変ですが、大会終了後に自動的に記録が残るようにすれば、それほどでもないと思います。会員業績などは文科省などのDBとリンクすると良いのかも知れません。

（7）Eメールでの情報提供について

問30 Eメールでの会員向け情報提供の方法や内容について　自由記述5件（3.9%）

・非常に有用

・月に一回など、定期的な形で情報をまとめてください。

・国際学会の情報をもっと提供してほしい

・Good system

・頻度も内容も充実していて大変良いと思います。

（8）学会入退会・会費などについて

問31 入退会の方法について　自由記述3件（2.3%）

・大会報告や理事会との関係での良いタイミングがわからない（会員資格変更も）

・議決権のない、一部情報のみ提供される準会員という立場があっても良いと思います。

・家族社会学会がどうなっているか知りませんが、他の学会で、滞納者の自動退会制度を作ったのは良いのですが、ちょうど5年満期の自動抹消を迎える会員が多数でてきて、困っております。幸いコロナでZOOM化して経費が殆どかからなくなり、また長年の留保金がかなりの額に達しており、現状のままで推移すれば、後、20年は会費無料で済ますことが判明したました。で、この際、会費を廃止しようと思いましたが、ベテランの先生がそれでは長年会費を納めている会員との公平性が保てないとの意見があり、仕方がないので、当面、会費徴収は見送ることにしました。つまり、いつか再開すれば5年満期で退会者が大量に出るのでしょうが、延期にしたので、止まっている状態です。

問32 会費金額や支払い方法、財務内容について　自由記述4件（3.9%）

・会費負担を感じない金額におさえてほしい。

・学生の会費をもう少し下げることは可能でしょうか。院生の暮らしを考えると半額以下でもと日ごろから感じます。

・国際学会などのクレジットカード払いは便利で良いですね。
・それほど余裕があるわけではない財務状況の中で、今回のようなコロナ禍での会員会員への配慮、また私のような高齢会員への会費減額を措置をとってくれていることを嬉しく思う。
今後もこのような配慮を続けて欲しい。

問33 **家族社会学会のあり方や活動について**　自由記述9件（7.0%）

・家族社会学会がコロナ禍にあってもそれ以前と同様に活動を続けているのは（このようなアンケートひとつとっても）、ひとえに役員や会員の先生方のご努力の賜物と思います。お疲れさまでございます。貴会の発展と会員の研究活動に対してサポーティブである文化の継承を祈っております。
・コロナ禍が収束したら、かつての家族社会学セミナーのように（若手・院生向けの）泊まり込みのセミナーを開催していただけると良いかもしれない
・学会役員の皆様のご尽力に感謝しています。特に要望などはありません。
・会長、理事、委員の方々の活動に御礼申し上げます。
・査読の水準を下げたくないのは理解しますが、やや掲載論文が少ないように思います。「原著論文」と「研究ノート」の間のような位置づけのカテゴリーの論文があっても良いのかもしれません。
・ほかの学会と比べ、いろいろなことに積極的に取り組んでおり、頑張っている学会であり、役員等に深く感謝申し上げたいと存じます。
・研究活動に直接関わる取組も、研究活動をスムーズにするための事務的サポートも、いずれも迅速かつ丁寧に対応をしていただいていることを感じております。ありがとうございます。
・こうしたアンケート自体がとても大事だと思います。有難うございました。
・海外の研究者との交流を進めましょう！　人口減少に対応するにはそれしかありません。存続するにはそれしかないと思っています。